編集後記

去る十月十六、十七の両日曾我先生の満九十才の長寿を祝う頌寿記念会が催され、先生から「如来あっての信か、信あっての如来か」との講題による記念の講演を拝聴した。またこの会の発起人を代表して金子先生は、挨拶をかね「諸仏と善知識」というお話をされた。その席上、曾我先生は「ここに掲げた講題は、六十有余年前、恩師清沢満之先生から与えられた課題である。思えば六十年の自分のいのちは、この問い一つを憶念して来たといえよう」と語られ、金子先生はまた「自分は曾我先生によって、親鸞の教への眼を開かせて頂いた。その曾我先生が六十年間い続けられた課題を、今日ここに明らかにされようとしておられる。してみると金子の六十年もまた、このこと一つを聞くためにあったと申して過言ではないであろう」と応えられた。ただ一つの問いを明らかにせんとする一生と、ただ一つの答えを聞かんとする一生……両先生によって示された、いのちの深き感応の世界を目の当りに拝見して「前に生るる者は後を導き、後に生るる者は前を訪い、連続無窮にして願くば休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがための故に」という先達の一語を以て『教行信証』の巻を閉じんとされた、祖聖親鸞の精神を深思せしめられた。連続無窮なる願いに自己の生涯を尽し切る、いのちといのちとの感応に於て広くそして深く人類の課題を明らかならしめんとする学の場、それが真宗学会であるに違いない。その限り『親鸞教学』もまた、厳しくそれを具現するものでなくてはならないであろう。

さて、今号に掲載された曾我先生の論文は大学院での講義の筆録であり、称名念仏の意義を氷上燃火の譬喩に寄せて明らかにせられた。また金子先生は、先号に発表された「二部作教行信証」の課題を、更に深く追究され公開して下さった。広瀬、細川、幡谷の三先生の論文もそれぞれの研究主題に基づく成果を発表されたものである。

三回にわたった鈴木先生の「真宗概論」も今号を以て終った。改めて先生独自の教の尊さを仰がずにはいられない。

今回は特に宮本正尊先生の「教行信証と仏教」の掲載をお許し願えたことは望外の喜びであった。これは、本学の開学三百年祭（十月十三日）に於ける記念講演の筆録に、先生自身の御加筆を頂いたものである。ほのぼのとした愛情の下に真宗の学の公開性を具体的に御教示頂くことができたことは欣快にたえない。

なお、大学院修士一回生本多恵君の論文は明るい学会の将来を思わしめるものがある。（伊東）

昭和40年11月25日　印刷
昭和40年12月10日　発行
親鸞教学　第7号　¥200
京都市北区小山上総町22
編集　大谷大学真宗学会
発行　親鸞教学編集部
代表　松原祐善
大谷大学真宗学研究室　振替　京都8225番
京都市中京区寺町通三条上ル
発売　文栄堂書店
振替　京都2948番
京都市東山区山科四宮
印刷　一燈園印刷部
電話　58－2901番